しまねの社会教育だより

vol.37
2023.9月号
島根県立青少年センター 社会教育研修センター

photo 知夫村における特色ある宿泊体験活動
～「生きる力」「豊かな心」を育む９年間を通した系統的・発展的な宿泊体験活動～

島根県観光キャラクター「しまねっこ」
島観連許諾第7720号

特集 今こそ「親学プログラム」!!
～親同士のつながりづくりに～

contents

■ 令和５年度コーディネーター研修 報告
■ 学びがチカラに!!　〔川本町教育委員会　吉本 悠真さん〕
■ わがまちの社会教育の実践紹介　〔松江市〕
■ しまねの社会教育 × 子育て世代包括支援センター「すくすく」〔浜田市〕

特集 今こそ「親学プログラム」!!

東部・西部社会教育研修センターでは、平成23年度に家庭教育支援の一つの手法として、参加型学習を活用した「しまね学習支援プログラム『親学プログラム』」（以下「親学プログラム」）を、平成27年度には「親学プログラム２」を開発しました。それ以降毎年、市町村教育委員会に協力をいただきながら「親学プログラム活用状況調査」を行い、集計結果を公表してきました。

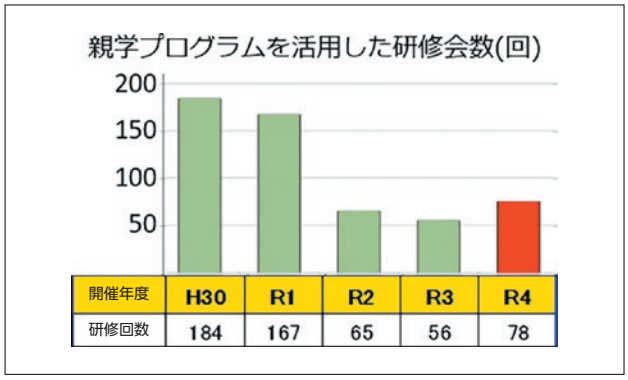
今回は、コロナ禍でも必要と考え、実施してこられた大田市の事例を紹介します。

昨年度の「親学プログラム活用状況調査結果報告書」より

ここ数年の親学プログラムを活用した研修会数は、年々減少傾向にありました。そこにコロナ禍も相まって激減するなか、昨年(令和４年)度には増加しました。新型コロナウイルス感染症が５類に移行したのは、今年度の５月のことです。

では、なぜ昨年度に増加したのでしょうか。

センターとしては**「やっぱり『親学プログラム』のつながりづくりの機能が求められているのではないか」**と考えました。



「親学プログラム」は「親同士のつながりづくりプログラム」です！

大田市では、子ども家庭支援課が主催する「育児教室」のなかで、親学プログラムを活用した「子育てトーク」を行っています。「子育てトーク」は、子ども家庭支援課が教育委員会に依頼し、派遣されたファシリテーターの進行のもと、参加した保護者がお互いに子育てに関する思いや考えを交流する会です。「育児教室」は、３年目を迎える事業です。どのような目的で事業を計画され、参加者の反応はどうだったのか、担当の西上さん、森さんにお話を伺いました。

西上さん、森さんのお話

育児教室は、主に妊婦から１歳までのお子さんをもつ保護者を対象に、「親の学びの機会・参加する保護者同士のつながりの場」をつくり、安心して育児に取り組んでもらうことを目的にスタートしました。コロナ禍のため、健診でも少人数に分かれて受診してもらう状況が続いていました。育休中の親は、ただでさえ日ごろわが子と２人の時間が続くため、どうしても社会からの孤立感を感じてしまいがちです。そのような背景も含めて、この教室を実施しました。実際に参加した保護者の方たちは、話のなかで「私もそう！」と共感しながら、終わりの時間がきたのも気づかないくらい、たくさんお話をされます。アンケート数値では、「楽しかった」が100％だったこともあります。また「自分では考えていなかった意見や考え方を知ることができてよかった。」「他のお母さんとお話をする機会があまりないので新鮮で楽しかった。」「いろんなお母さんと交流が持てたのがうれしかった。」という記述もありました。

親学プログラムは、**「こちらの価値に引っ張っていく」のではなく、「自分たちで自分なりの答えを導き出していく」ことに価値がある**と思います。今後は、プログラムの内容をブラッシュアップしたり、保育士さんなど保護者とかかわることのある人に広めたりしていけたらと思っています。

～親同士のつながりづくりに～

コロナ禍で、研修会の数が減っているということは、親学プログラムを体験することなく子どもが入園・入学した保護者もおられるはず…。どの保護者にも体験してもらうことで、保護者同士のつながりが生まれるといいなあ。

「幼稚園・こども園PTA連合会総会」で親学プログラム!!

東部・西部社会教育研修センターでは、**「早い段階（子どもが入園・入学し、保護者同士の関係性がまだ築かれてない段階）で、親学プログラムの体験をすることでよりよい関係性が生まれ、親子ともに安心した園・学校生活を送ることができる」**と考えています。先の調査から、「親学プログラムが活用される研修の機会」は、「PTA研修」に次いで「就学時健康診断」・「１日入学」において多く活用されています。そこで、普及を図るために標題の会に参加し、親学プログラムの紹介をした後、プログラム（短縮バージョン）の体験を実施しました。（＊進行表は、東部・西部社会教育研修センターHP「しまね学習支援プログラム」に掲載）

プログラム体験では、参加者（園の職員・PTA会長）同士で「早寝・早起き・朝ご飯」をテーマに話し合っていただきました。「なるほど！」と他者の意見から新たな気づきを得たり、「そうそう！」と思いを共有したりする場面があり、終始和やかな雰囲気でプログラムが進んでいきました。

参加者の声

- 初対面なのに子育てのことだとみんな会話が弾み、「それぞれ家で工夫していることを話すことは、とても大切なコミュニケーションだな」と痛感しました。
- 体験してみて、とても盛り上がり楽しかったです。話すことで保護者同士のつながりが深まると思います!!ありがとうございました。

開催者側の声

- 関係づくりにとてもよいものだと思いました。（会場の雰囲気が一変したのを感じました。）自園でもここ数年実施させていただき、とてもよい研修になっています。
- 初めて出会う方々とコミュニケーションを図るにはもってこいの内容でした。コロナの対応に変化が見られるようになったので取り入れていきたいです。
- 今、保護者同士があまりうまくいっていないので、もっと早く知って活用すれば違っていたかも…と思いました。
- 実演してみることでこのプログラムの良さがわかるし、PTA研修に勧めたいと思います。

「親学プログラム」は「つながりづくり」　ぜひご活用ください!!

園の職員・保護者に、体験をとおして「親学プログラムは、親同士のつながりづくりに有効」だと感じていただきました。東部･西部社会教育研修センターは、**価値観の押しつけではなく、親同士のつながりづくりのため**に、さらなる普及を図っていきます。親学プログラムに少しでも関心をもたれた方は、ぜひ東部・西部社会教育研修センターHPの「しまね学習支援プログラム」をご覧ください。　＊上記プログラム(短縮バージョン)もあります。

例：「もう少し詳しく知りたいな」……「リーフレット」「活用の手引き」
「どんなプログラムがあるの？」…「プログラム」ダウンロード
「どうすれば実施できるの？」……「市町村担当窓口連絡先等」

「親学プログラム」HP　アクセスをお待ちしております！

報告 コーディネーター研修

～コーディネーターとしての実践力を高める～

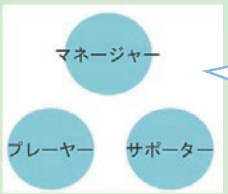
■講義　しまねのコーディネーターに求めたいこと

島根大学大学院教育学研究科（教職大学院）講師　　大野　公寛 氏

■コーディネーターとしての 立ち位置 を考えよう

島根県では学校と地域をつなぐ「地域学校協働活動推進員」「高校魅力化コーディネーター」等（以下文中は「CN」と表記）、全国に先んじて配置しています。CNは多様で、様々な現場で様々な課題に取り組むCNがいて、役割はそれぞれのCNで異なっています。だからこそ、自分はどの「現場」で、どのような「業務」（コーディネート機能）を担っているかという、自分の「立ち位置」を考えてみることが必要です。

「現場」は、「学校」「地域」、これらをつなぐ「協働体制」の３つの分類から、どこに自分の中心があるかを整理してみてください。



「業務」は、現場に寄り添いながら計画の実行を支援する「プレイヤー」的役割、設定された課題に対して計画を立案・実行・改善する「サポーター」的役割、課題を設定し解決の枠組みを整え全体を統括する「マネージャー」的役割の３つの役割から考えるとよいです。

出典：一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム編（2020）三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社

自分の**「立ち位置」を自覚**し、どうつなぐかが大切と考えます。「立ち位置」を自覚することで、自分がよりよくコーディネートしていくために必要なもの（過不足や次のステップ）が見えてくると思います。

■コーディネーターの「機能の変化／創出」～どうつなぐのか～

CNの機能は、現場の状況やCNとしての経験段階で変化していくと考えます。それぞれが果たす役割は多様で、必要な機能を自ら現場に創出するダイナミズムも時には必要となります。

◇価値観を相互に尊重する姿勢◇ たとえ一致しない価値観であっても、お互いがWIN-WINになるために「何でだろう」と考えることを大事にして、その上で異なったものをつないでいく必要があります。
◇違った価値観の出会いを活かすことの必要性◇ 違うことがおもしろく、違っていることが大事なのです。
◇つながることで何かが生まれる◇ 今まではなかった、できなかったことができるようになると考えます。

そのために、研修などを通して、CN同士や関係者で共に学び合う必要があります。例えば、成功体験や成功のカギについて共有し、そこからコーディネートについてあらためて考えることができると思います。
CN自らが新しい役割を生み出していく、または創っていくことが期待されているのです。

■学校とかかわるコーディネーターの３つのポイント

◇社会とつなぐ◇

子どもがリアルな社会で学ぶためには、学校は社会に開かれた教育課程でなければ成立しません。そのために学校を開くことが必要です。

◇社会でうけとめる◇

子ども・子育て・教育を社会全体でうけ止め、子どもの存在を無条件で肯定することが地域の重要な役割です。そうした機能を発揮できる機会をつくることが大切であり、それをつなぐことがCNの役割です。つないだ先の地域が、つながりの強い社会ほど教育達成度も高くなるため、つながりの強い地域づくりも併せて必要となります。

◇社会へとむすびなおす◇

教育や子育ては、家庭や本人の責任に課せられることが多くなっていますが、子どもの声や意見、学びを地域へと、社会とむすびなおすことが大切です。教育の公共事業化が必要です。

子どもの声や意見、学びの成果を、学校運営協議会や地域学校協働活動のマネジメントと接続することはCNの大切な役割となります。

■意見交流から

種々の所属団体からCNの方が集まり話せたことで知見が広がった。高校はコミュニティの一部であるからこそ、卒業していく子どもが学びを社会でいかして欲しい。そのためにも、教育の場をコミュニティ全体に広げて、コミュニティで子どもを育てることが重要だと再確認した。CNは教育の場を広げるサポーターだと分かった。

様々な地域と様々な立場の方が混ざるからこそできた話があった。深い学びとなった。学校を自由で創造的な場にしていき、もっと子どもたちが楽しめる教育をしていきたいと思えた。

学校と地域に関わるコーディネーターや関係機関の様々な立場の方々が集い、「社会に開かれた教育課程」「地域学校協働活動」「地域と学校が連携していく上で大事なコーディネーターの役割やコーディネートする際の視点」等について実践発表や講義から学びました。
また、様々な立場の方が一堂に会することで、学びや出会いを通し、新たな気づきや今後の実践意欲を高める場となりました。

■実践発表　具体的な取り組みを紹介します！

海士町の!!色とりどりコーディネーター
～学校と地域で共にあまっ子を育むための
コーディネーターの役割とそれぞれの思い～

海士町共育コーディネーター　根岸　浩章さん
銭谷　郁さん
杉野　修平さん
海士町教育委員会派遣社会教育主事　池田　高理さん

■地域学校協働活動の推進体制

海士町では独自の制度を導入し、「海士町版コミュニティ・スクール」として、中学校区にある３つの小中学校で１つの学校運営協議会を設置し、各学校のCNも参加しています。
「どんなあまっ子を育てていきたいか、どんな地域をつくっていきたいか」を協議、学校・地域全体で目標を共有し、教育活動を展開しています。

■共育コーディネーターの役割と大切にしていること

第１回協議会のテーマは「Let`s　協働大作戦！」でした。話し合われたことを情報共有し、学校が動いていくためにはCNの関わりは不可欠です。学校からの依頼をCNがそれぞれ地域と連携・協働できるように調整・サポートします。CNは地域人材や先生の想いを聴き、海士町らしいふるさと・キャリア教育等への伴走（授業・学校行事づくりの手助け・地域活動等なんでも）をするようにしています。未来を見据えつつ、「今、海士町の小・中学生だからできることを！」「一日の終わりに今日はいい日だったと思ってもらいたい！」と考え、共に喜ぶ（楽しむ）顔が見られるように取り組んでいます。

■今後の展望

CNとは何か、役割を考えたとき、ミツバチのように「媒介者」としてあちこちとびまわり、既存の組織や仕組みの境界を溶かした偶然のつながり・にぎわいを地域・学校に生成していくような存在と考えました。そのための関わり方として、「伴走者・併走者」で在るよう意識して今後もがんばります。

コーディネーターとして大切にしていること
～三隅中学校区地域学校協働活動の取組より～

浜田市共育コーディネーター（三隅中学校区）
渡辺 支帆子さん
浜田市教育委員会派遣社会教育主事　原田　千里さん

■地域学校協働活動の推進体制

教育振興計画の施策「はまだっ子共育推進事業」では、地域ぐるみで子どもを育み、子どもも大人も、地域も高まり合おうという理念のもと地域学校協働活動を推進しています。三隅中学校区は、小学校２校・中学校１校・まちづくりセンター６箇所があり、そこにエリアCN１名、共育CN４名を配置しています。

■共育コーディネーターの役割と大切にしていること

学校と地域からの声をつなぎ、特別支援学級の神楽体験や夏野菜づくり、保健室へ登校する生徒が制作した雑貨の販売、地域OBによる部活動支援などの活動を行いました。学校から提供いただいたホワイトボードに活動の様子を紹介したり、企画内容や参加者・ボランティア募集の告知をしたりするようにしました。ホワイトボードを書いていると、生徒や先生方から声をかけてもらえるようになり、今では私にとって、ホワイトボードが生徒や先生と地域をつなぐ、協働活動の種が飛んでくるコミュニケーションツールとなっています。業務のなかで失敗や反省することもありますが、「今、自分にできることを全力で！環境や立場にとらわれないで、思い立ったらすぐ行動!!」を心がけています。

■今後の展望

いろいろな人と話をすることで元気（パワー）をもらい、つながりができることで世界が広がります。まさにプラスなことしかありません。これからも地域学校協働活動がますます充実するよう、たくさんの人と積極的に関わっていきたいです。

■地域と学校がパートナーとなって

島根県で進める「結集!しまねの子育て協働プロジェクト」とは、幅広い地域住民の参画を得て、学校・家庭・地域が連携・協働しながら、地域総がかりで子どもの成長を支え、地域力を高めていこうとする取組です。そのため、学校と地域住民が、目標やビジョンを共有し、地域全体で教育に取り組む体制づくりや気運の醸成を図り、総合的に運営を進めています。
地域と学校とをつなぐCNやCN的な役割を担う方々の活躍により、地域ぐるみで子育てに向かう気運がさらに高まり、地域と学校がパートナーとして活動が活発になっていくことを願っています。そして、住民の一人一人のやりがいや生きがいに火が灯り、子育てを通した地域づくりを担う人づくりへと波及していくことを、東部・西部社会教育研修センターは応援しています。

学びがチカラに!!

社会教育研修センターの研修で学んだことを、地域や現場での実践に活かしていらっしゃる方を紹介します

「川本まちが好き！」　自分のまちを誇れる人づくり

川本町教育委員会　社会教育係　　吉本　悠真 さん

教育委員会へ配属になって４年目の吉本さんは、着任した１年目に「ファシリテーター養成講座」を、そして昨年度「社会教育主事講習〔B〕」を受講されました。
それらの学びが教育委員会での職務にどのように生かされたのかを伺ってきました。

■「川本町ふるさとカルタ」完成！

そもそも「ファシリテーター」という言葉の意味を知らずに、不安がいっぱいの中で参加しました。
講義を受ける中で、ファシリテーターは地域課題に対する学習プログラムを設計し、円滑に推進・進行する役割であることを知りました。そして、グループワークを進めていく中で、何より自分自身が楽しめないと場の雰囲気が良くならないと感じました。実際にファシリテートを始めると、２つのグループで進み具合が違ってその調整に時間がかかり、全体の40分という時間内に収めるために、ふり返りの時間を割愛して対応しました。終了後、受講生の皆さんから「ご当地カルタはいいアイデアなので、ぜひ完成させてください。」という声をいただき、元気が出ました。

受講後、研修でのプログラムに工夫を加え、事前に町内で住民の皆さんから「読み札」を募集し、それを使ってワークを実施しました。観光や特産品や伝統文化などについてたくさんのアイデアが出ました。そして、「ふるさと思いやり基金」を活用して、「川本町ふるさとカルタ」が出来上がりました。住民の皆さんの川本町を愛する気持ちにあふれたカルタです。

■「かわもとぽかぽか親子プロジェクト（K-POP）」もパワーアップ！

「かわもとぽかぽか親子プロジェクト」は親子を対象にした事業です。昨年度受講した社会教育主事講習〔B〕の事業計画づくりを基にして、次のようなねらいをもって進めました。

○親子でのたけのこ掘りと、保護者同士での子育てトークや子どもたちでの遊びを体験することを通して、子ども、保護者、地域の方相互の交流を深める。

○自然の中で体を動かすことを通して、町内の魅力を肌で感じる。

当日の参加者は、11家族44名。活動に協力してくださる方々としては、地域の方や「かわもとあそラボ」を中心にした中学生・高校生・大学生インターンなど約30名が一緒に活動し楽しみました。当日は天候にも恵まれ、参加した親子はもちろん、指導してくださる地域の方も中・高校生も、みんな大はしゃぎで楽しい自然体験となりました。採ったたけのこをゆでたり、地域自慢のおこわを昼食にいただいたり、午後は、保護者は子育てトークで親同士の交流を深め、子どもは中・高校生と楽しく遊びました。

１日を通して終始和やかな雰囲気の中で体験と交流ができ、「川本町を好き」になってもらえたことと思います。

吉本さんは、「『やりたい！』が『できる！』まち」を、仕事でもスポーツでも神楽でも地域活動でも、様々なところで実践しておられます。「川本町はやりたいことができる環境」であることを、すべての町民に実感してもらえるよう、これからも様々な人や団体と活動しつながりを深めていかれることでしょう。

わがまちの

社会教育の実践紹介

松江市

合言葉は“コラボ”
～高校生イベント＆フラワープロジェクト～

松江市　川津公民館　主任　　長岡　和志

川津地区では、毎年夏休みに、「子どもの居場所づくり事業」を実施しています。子どもたちがいろいろな体験をすることで、充実した夏休みを過ごしてほしいと願っての取組です。初年度は11事業の実施でしたが、７年目の今年は夏休み期間全39日間のうち29日間36事業の実施を予定しています。地区内の各関係団体が、子どもたちに日頃できない体験をしてほしいと願い、アイディアを出し合っています。フラワーアレンジメントや和菓子作りなど、様々な内容を企画しています。この事業の中で昨年度から松江東高校の生徒が主体的に企画し、準備･実施するプログラムを行っています。今年は、海ゴミ工作や書道パフォーマンス体験など４つの事業を計画しています。

11月に実施した「ありがとうコスモス」イベント

書道パフォーマンス体験

また地域内を流れている朝酌川の河川敷は荒れ放題で長年問題となっていました。その河川敷を花でいっぱいにしようと「フラワープロジェクト」を行っています。地元町内会や商店街振興組合･高校生・公民館等のさまざまな団体が協力して、毎月活動をしています。

このように年代・業種を超えた人々が一緒に活動することで地域に新たな「つながり」が生まれました。これからも人と人のつながりを大切にし、活動の輪を広げていきます。

３年目の実施となったフラワープロジェクトですが、月に１回河川敷の開墾や種まきなど実施していますが、毎月いろいろな方が参加されます。その中に松江東高校の生徒や先生が参加するようになり、この繋がりから昨年度は生徒が公民館の夏休み事業を企画・実施することになりました。生徒が学校で学んだことを地域で実践する。川津地区でこの生徒の実践を伴走しているのは公民館です。今後もいろいろなコラボからたくさんの可能性が広がることを期待しています。

（松江教育事務所　派遣社会教育主事）

しまねの社会教育 × 子育て世代包括支援センター「すくすく」〔浜田市〕

このページでは、社会教育と各方面の関係者、機関等とのコラボレーションを紹介します。
第３弾は、「親学プログラム×福祉」です。「親学ファシリテーター養成講座」を受講された方が、現在の業務に学びを生かしながら「コーディネーター」として活躍する姿を紹介します。

みんなで子育て　―親と親・団体をつなげる―

浜田市子育て世代包括支援センター「すくすく」は、令和４年４月に新たにオープンしました。「認める・つながる・支え合う　一緒に遊び、みんなで子育て」をモットーに、「子どもの育つ力」と「保護者の安心した子育て」のお手伝いをしている施設です。親子の会やママパパ学級、食育講座や育児相談・乳幼児健診など、まさに子育て世代を包括した支援を行っています。そのため「すくすく」には保健師、看護師、助産師、栄養士、保育士等の専門職員がスタッフとして勤務されています。そのなかで「子育てコーディネーター」である 中村 たづるさんにお話を伺ってきました。

園庭の様子

Q. 中村さんは、平成25年度に「親学ファシリテーター養成講座」を受講されたそうですが、いかがでしたか？

A. 業務に生かしたいと思い、受講しました。午前中は、親役になって親学プログラムを体験しました。初対面でも誰もが参加して話をすることができることに親学プログラムの魅力を感じました。午後は２人組で実際にファシリテートにチャレンジしました。とても緊張しましたが、受講者同士がいい反応をしてくださり、助けてもらったと感じていました。

Q. 親学ファシリテーターとして実践されたときのことを教えてください。

A. 当時「すくすく」では「ママのつどい」という子育てについての交流会を定期的に行っており、そこでプログラムを活用･実践しました。扱うプログラムについては、テーマや内容、対象（子どもの年齢）などから判断しました。会の最初は、こちらの投げかけに対してどのお母さんも反応が薄くて、静かな雰囲気でした。

しかし、ワークが進むにつれて会話が弾みだし、参加者が楽しそうな様子で、最後には「来てよかった」という声を聞くことができました。普段話すことのできないお母さん方にとって、お互いに共通の悩みを共有することで、新たな気づきを得たり、つながりができたりする機会にすることができたと思います。計画段階では、参加者が参加しやすく、会話が盛り上がるようにカードワークの手法を取り入れたり、時間や内容を吟味しながらアイスブレイクを行ったりと、プログラムをアレンジしながら作成しました。その後、自分たちで「トイレトレーニング」をテーマにした独自のプログラムも作りました。

Q. 現在の「子育てコーディネーター」の業務に生かされていることはありますか？

A. 「子育てコーディネーター」の役割は、主に親と親・団体をつなげることです。育児に関する相談を受けて、「すくすく」の保健師さんや関係機関につないだり､子育てサークルの立ち上げの支援を行ったりしています。親学ファシリテーターをしていて、親学プログラムには「子育てについて親に安心してもらうことができる」「孤立する親のつながりづくりになる」のが魅力だと実感しました。これは、今の業務においても大切な視点だと思っています。これからも「親に対して親身に寄り添い続ける」「いろいろなところに何回も出向き、つながりをつくる」ことを大切にしていきたいです。

今の業務が「楽しい！」とおっしゃる中村さん。今後も親学ファシリテーターを続けていくそうで、ブラッシュアップのために「ファシリテーター養成講座」を受講される予定です。学び続ける中村さんは、まわりの方々の信頼を得ながら「みんなで子育て」を進めておられます。

東部社会教育研修センター
〒691-0074 出雲市小境町1991-2　サン･レイク2F
Tel.(0853)67-9060　Fax.(0853)69-1380
URL:https://www.pref.shimane.lg.jp/tobu_shakaikyoiku/
E-mail : tobu_shakaikyoiku@pref.shimane.lg.jp

西部社会教育研修センター
〒697-0016 浜田市野原町1826-1　いわみーる3F
Tel.(0855)24-9344　Fax.(0855)24-9345
URL:https://www.pref.shimane.lg.jp/seibu_shakaikyoiku/
E-mail : seibu_shakaikyoiku@pref.shimane.lg.jp

第38号は２月末発行予定

「親学プログラム」
「地域魅力化プログラム」
※当センターホームページから閲覧・ダウンロードできます。